書評

在日女性文学
地に舟をこげ
創刊号

大野貞枝

発行　　在日女性文芸協会
発売元　　社会評論社
定価　　1200円プラス税

・・

作家の高英梨の呼びかけで、在日女性の文学文芸誌が創刊された。

創刊の動機は次のように述べられている。在日社会は四代目が社会人になろうとし、世代の違いや階層分離によって亀裂が生じ、また朝鮮半島の実態が反映して半端なものではない。しかしそうした在日社会の実態ではなく、自分を含めた一世や二世の女たちの受苦の姿を記録しておきたい。在日女性の実存を日本列島と在日社会だけに閉じ込めたくはないからだ。

高はその感情を敢えて「恨」と呼ぶ。封建の厳しい身分制度の下の、自己解放のシャーマンの儀式を「恨解き」というが、「地に舟をこげ」は現代における在日女性の、女であるが故の生き難さの「恨解き」の場となることをめざす。

表紙を繰れば、澤地久枝と高英梨の対談が冒頭にある。ともに八十路を越えた女性とは思えないパワーの持ち主だ。全国に燎原の火のように広がる「九条の会」をひっぱる一人である澤地は、日本の戦後史は在日の歴史を絡めて書くべきだという。日本人だけの戦後史は、のっぺら棒になるからだ。戦後がよくわかるためには、在日の一人ひとりがたどってきた運命を抜きにはできない。そうすると、日本人がどんなにいい加減で無責任で、ひどいことをしたかがいやでも出てくると述べる。在日女性文学はそういう意味で、日本人にとっても必読書であるだろう。

掲載されている内容は、上記の対談のほか、小説、随想、評論、紀行文、詩、短歌、コラム、写真、レシピなどだ。紙面の都合ですべての紹介は無理なので、各ジャンルから一部を取り上げて紹介したい。

小説

頁のボリュームの半分は、小説三篇が占めるのでまずは小説から取り上げる。ただし、在日文学を評する素養はもちあわせていない一読者の感想文として、読んでいただきたい。

金蒼生　「豚の仔」

自殺や離婚を繰り返して在日を生き抜いた姉の死をめぐる、主人公と兄との争いがモチーフだ。姉が残した財産を独り占めし、祭祀もしない横暴な兄。しかし、彼の人生の不条理に頁数を割かず、また他の兄弟の境遇もさらりと書き流しているため、これまでの在日文学にありがちな、行き場がない重苦しさが漂わない。かつての在日文学から受けた印象を上流の岩石だとすれば、この作品は河口まで流れ着いた角がとれた石であり、時の流れがもたらした、在日の現状と変化を感じる在日文学作品だった。

金真須美 「ロスの御輿太鼓」

アメリカにおける日系移民に、自分の写し絵を見る精神安定剤を離せない青年が軸だ。日本にもアメリカにも受け入れられない一世は、「曇天の空みたいな瞳」を青年に向ける。それは、限界を越えた孤独を抱えた人物が思い浮かぶ言い回しだ。この例のように、文字面以上に発展した情景が広がる描写がいくつかある。そのため行間を読む、活字ならではの醍醐味があった。

なおこの作品は、国家と国家の狭間で生きるという課題に、真っ向から取り組んでいて、清冽なものが読後に残る。生きることに倦んでいる若い日本人にぜひ読んでほしい。

深沢夏衣 「恋歌」

３００枚（４００字原稿）にも及ぶ大作だ。主人公が心を許す女友達と、そこにからむ男友達との三人のミステリアスな交流を背景にしている。男友達の母親から受ける差別的な発言や、主人公が詠んだとする歌を、在日問題としてからめ、その苦悩を受け入れられない日本人たちを描く。しかしその歌そのものがはっきり書かれていないためか、テーマが明確でなく漠然としてしまった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

随想

今泉丹生

「クチュノ　サッキガ　チョット　チッカウ」

置かれた状況によって、人は本来持っていたはずの価値観や人格を守れなくなる。「スタンフォード監獄実験」の例をあげて、その事実に触れる。そしてそれ故に、社会にどんな状況を作っていくかがいかに大切かと説く。

怨念を外した視点で、日本人も在日も「共に生きたい。」という率直な語り口は、真っ当すぎて、むしろ男性には提起できない新鮮な在日論になっていると思う。

評論

呉文子 「在日一世の介護問題」

制度的無年金状態にスポットをあてる。五九年の国民年金創設時と、八二年の国籍条項撤廃時に、定住外国人に対して経過措置がとられなかったために、年金を受けられない在日韓国・朝鮮人は六万人ほどもいる。その現状を打破するための試みなども紹介している。儒教の影響下での在日女性の負担が思いやられる。

朴和美 「国家語」の呪縛を超えて
—舌のもつれを解く

在日コリアン全体を包囲する「国民　国家」という想像の共同体の呪縛について触れる。「国民＝民族」という国家主義は絶対的なものではなく、近代になって創られた概念だ。つまり「母国語」も、ここ百数十年のあいだに作られたものなのだ。

日本語を母語とする朝鮮籍・韓国籍の在日コリアンの人々はその、国民国家の線引きによって翻弄され、身を引き裂かれてしまう。国家や母国語の概念は無批判に受け入れるべきものではないと説く。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

朴民宣　みにさん家の食卓

作者は「さんねん峠」などの絵本の絵を画いている。今回、絵ばかりでなく、文章も味がある人だとわかった。

「さんねん峠」は筆者の子どもたちが幼かったころ読み聞かせた絵本で、その絵の色使いやタッチは、鮮明に思い出すことができる。優れた絵本作家による挿絵入りのレシピだといえる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

この欄によって、一人でも読んでみようかと思われるなら、とても嬉しいと思う。そしてこれは、男性女性を問わない呼びかけであることは言うまでもない。